

医療 DX プロジェクトシヨナル

第2回 株式会社インテック

糸藤一郎 株式会社インテック

医療を取り巻く環境の変化に対応し続けるために、医療機関ではDXに取り組まざるを得ない状況が続いている。しかしながらDXはITシステムを導入すれば良いというわけではなく、データをいかに活用するかが重要である。医療機関がデータを活用してDXを進めるためには情報活用基盤が必要であるという認識から、インテックは医療情報連携プラットフォームを提供している。

医療機関が院内の電子カルテや部門システムに蓄積されている医療情報を自由に活用することで、これまで出来なかつことを実現し、結果として患者や医療従事者、ひいては医療機関経営に貢献できるのではないかと考えている（図1）。

医療情報活用に関しての課題

- 既存システムにカスタマイズを実施したが、システム更新時にゼロクリアとなってしまった。
- カスタマイズで機能を追加したかったが費用が高額、もしくは対応してもらえないかった。
- システム更新時にベンダーを変更したこと、蓄積してきた過去データと整合性が取れなくなり研究利用や統計利用に手間がかかるようになった。
- 患者の検査結果の値がパニック値だった時やオーダーが変更になった時はリアルタイムで情報を受け取りたい。
- 電子カルテに入力したデータを、臨床研究/治験用のEDCや症例データベースなどにもう一度入力しており、そのため電子カルテの画面をあちこち開かなければならない。
- DWHからデータを抽出して活用したいが、必要な部門システムの情報を取り

込まれていないことがある。また取り込まれていたとしてもベンダーごとのデータ形式を修正しなければならず活用するのに手間がかかる。

- DWHや統合ビューウーなどの情報活用システムを導入すればするほど既存システムとのI/Fが増え、それぞれのシステムに個別最適なデータが分散蓄積されてしまう。
- 自分のパソコンにあるソフトでデータを見たり、加工したりしたい。
- 複数の系列病院から経営情報や患者情報、症例情報を集めて集約蓄積しているが、採用しているシステムのベンダーが異なるため手作業でデータを整形している。

上記は医療関係者からよく聞く課題の一部であるが、これらは特定の医療機関で起こっていることではなく、多くの医療機関において当てはまる点がいくつもあるのではないかだろうか（図2）。

課題の背景

医療情報活用に関する課題の背景について改めて整理する。

1.分散蓄積されている医療情報

電子カルテに繋がる部門システムはすべての情報を電子カルテに送っているわけではない。例えば検査システムの場合、検査レポート参照のためのURLを電子カルテに送ることが多いが、部門システム内にのみ保持している情報もある。

2.ベンダーごとに異なる情報フォーマット

項目名のみならず、データ構造や単位の表現がベンダーごとに異なっている場合があり、そのまま連結して使用することができない。同一院内だけではなく複数病院の患者情報や症例情報、経営情報を集約する場合でも同様である。

3.標準化されていないコード

マスターには標準コードだけではなく、ベンダーの独自コードや病院で追加したハウスコードなどが設定されている場合があり、複数拠点でのデータ活用の制約の一つになっている。

4.非構造化データ

システムの中には項目ごとに分かれたデータだけでなく、テキストで記入されたカルテ記事なども存在しており、何らかの

